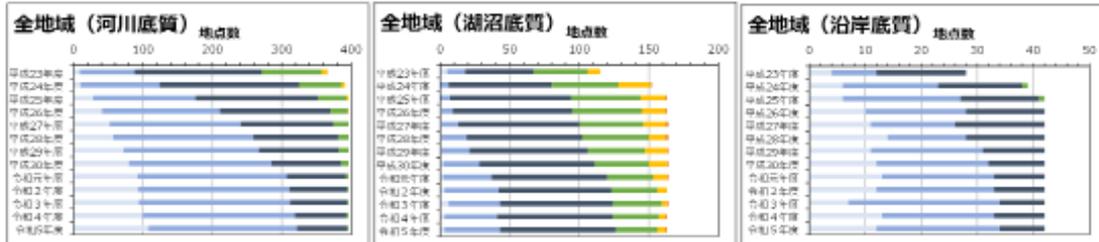


モニタリングを継続的に行っている地点のデータを用いて、以下の方法により地点別の濃度分布の推移を確認した。各地点における放射性セシウム(Cs-134とCs-137の合計値)の全調査結果を用いて、地点ごとに平均値(算術平均、検出下限値未満はゼロで算出。)を求め、全ての地点平均値を濃度別に6区分に整理した。



経年的には、高濃度区分が減少。令和5年度は、検出下限値未満が108地点(27.3%)、10以上100Bq/kg未満が214地点(54.0%)、100以上1,000Bq/kg未満が72地点(18.2%)であり、100Bq/kg未満の地点が全体の約81%を占めていた。

経年的には、高濃度区分が減少しているが、河川に比べ緩やか。令和5年度は、検出下限値未満が3地点(1.8%)、10以上100Bq/kg未満が40地点(24.5%)、100以上1,000Bq/kg未満が83地点(50.8%)であり、1,000Bq/kg未満の地点が全体の約77%を占めていた。

経年的には、高濃度区分はみられない。令和5年度は、検出下限値未満が12地点(29.3%)、10以上100Bq/kg未満が21地点(51.2%)、100以上1,000Bq/kg未満が8地点(19.5%)であり、100Bq/kg未満の地点が全体の約80%を占めていた。

令和6年度第2回水環境における放射性物質の常時監視に関する評価検討会(環境省)資料
(https://www.env.go.jp/air/rmcm/conf_cm2/r0611.html)より作成

2023年度も前年に引き続き、河川、湖沼・水源地、沿岸域の底質の放射性セシウム濃度の調査が行われました。

上記は、底質の放射性セシウム濃度の調査結果です。

本資料への収録日：2025年3月31日